



宮崎神楽の特徴

- 圧倒的な数の多さ(約三五〇)。
- 神楽の奉納は集落の神社から氏神様を民家(神楽宿)にお迎えして行われる場合が多い。
- 番付(演目)は三十三番、またはそれに近い数を備えているものが多い。

宮崎神楽の分類

山口保明『宮崎の神楽』による
 冬神楽(11月~1月) 春神楽(2月~5月)

● 冬神楽
 ● 春神楽
 ● 夏神楽
 ● 秋神楽

岩戸五番とは

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番数
本花	袖花	山森	地割	岩潜	沖逢	弓正護	太刀神添	武智	弊神添	地固	杉登	鎮守	神下ろし	大殿	彦舞	演目
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
雲下ろし	繰下ろし	注連口	御柴	日の前	大神	住吉	舞開	戸取	柴引	手力雄	鋤女	伊勢	御神体	八鉢	七貴神	五穀

岩戸五番とは

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番数
本花	袖花	山森	地割	岩潜	冲逢	弓正護	太刀神添	武智	弊神添	地固	衫登	鎮守	神下ろし	太殿	彦舞	演目
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
雲下ろし	繰下ろし	注連口	御柴	日の前	大神	住吉	舞開	戸取	柴引	手力雄	細女	伊勢	御神体	八鉢	七貴神	五穀

なぜ「六」なのに「五番」か？

- 「伊勢」が「序」だから？
- 陰陽五行説の影響？

偶数 → 陰数

奇数 → 陽数

五節句(正月七日・三月三日・五月五日・
七月七日・九月九日)

「天の岩戸」のおさらい(1)

故是に天照大御神見畏みて、天の石屋戸を開きて刺許母理@此の三字は音を以ぬよ。@坐しき。爾に高天の原皆暗く、葦原中國悉に闇し。此れに因りて常夜往きき。是に萬の神の聲は、狭蜷那須@此の二字は音を以ぬよ。@満ち、萬の妖悉に發りき。

「天の岩戸」のおさらい(2)

天手力男神、戸の掖に隠り立ちて、天宇受賣命、天の香山の天の日影を手次に繋けて、天の眞拆を縵と爲て、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、天の石屋戸に汗氣@此の二字は音を以ぬよ。@伏せて踏み登椀呂許志、@此の五字は音を以ぬよ。@神懸り爲て、胸乳を掛き出で裳緒を番登に忍し垂れき。爾に高天の原動みて、八百萬の神共に咲ひき。

「天の岩戸」のおさらい(3)

天照大御神、逾奇しと思ほして、稍戸より出でて臨み坐す時に、其の隠り立てりし天手力男神、其の御手を取りて引き出す即ち、布刀玉命、尻久米(此の二字は音を以てあよ)繩を其の御後方に控き度して自言しし曰、「此れより内にな還り入りそ」とまをしき。故、天照大御神出で坐しし時、高天の原も葦原中國も、自ら照り明りき。

「天の岩戸」神話の意味

- ①日蝕説
- ②冬至説
 - いずれにせよ農耕文化には重要事
- (伝説的な)神楽の起源
 - アメノウズメの舞

ふたたび岩戸五番

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番数
本花	袖花	山森	地割	岩潜	沖逢	弓正護	太刀神添	武智	弊神添	地固	杉登	鎮守	神下ろし	太殿	彦舞	演目
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
雲下ろし	繰下ろし	注連口	御柴	日の前	大神	住吉	舞開	戸取	柴引	手力雄	鉦女	伊勢	御神体	八鉢	七貴神	五穀

伊勢



鈿女



手力雄



柴引



なぜ「柴引」？

- ・類感呪術？
- ・天の香山の五百津眞賢木を根許士爾許士て、@許より下の五字は音を以ゝよ@上枝に八尺の勾穂の五百津の御須麻流の玉を取り著け、中枝に八尺鏡@八尺を訓みてヤアタと云ふ@を取り繫け、下枝に白丹寸手、青丹寸手を取り垂でて、

戸取



舞開



ふたたび戸取から舞開



引用文献

- 山口保明『宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承』
(鉾脈社 2000年)
- 『古事記』本文(岩波古典文学大系)
ただし、一部改めたところがある。